

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第 153号

平成27年1月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (2)

Spiritual Power

Spiritual life が我々にある時 Spiritual power が漲る。

Physical と mental と spiritual にわけるとき、Spiritual power が盛んになる時、mental も physical も共に盛んになって来る。真に福音が徹底する時すべての力が盛んになってくる。

強制の必要性、不完全な人間であればこそ強制は必要。無制限の自由はよくない。7時の礼拝は強制して可なり。朝皆がそういうようだったら生活が一変するだろう。寝ていては真理は分からん。真理と生活は裏表。

(昭和 25 年 2 月 3 日 金曜会)

## 無教会青年に猛省を促す

近頃無教会の人達に疑問を持つこと多く「無教会青年に猛省を促す」という題で無教会の雑誌に出したいと思っている。内村先生の考えている無教会と今の人達とは大分違うようだ。内村先生は自分と信仰のあり方の違う宮部金吾に、有名なロマ書の講義の巻頭にデイクレーションを送っている。このことは金沢常雄先輩が札幌独立教会の牧師をしばらくしておられたのでその関係でお伺いしたのである。

ここに Christian Friendship がある。こういう基督者の寛容について無教会の人達はあまり知らないようだ。福音は教会無教会の区別ないものである。在る所はただ福音を述べ伝えるところにおいてのみあるのである。またこれ以外に福音はない。内村さんが教会に同情と理解を充分持って居られたことを特筆大書したい。

(昭和 25 年 5 月 19 日 金曜会)

## 心の底で命ずる声に従え

近頃よく“自由、自由”と叫ぶ。しかし人間の仕事の底には何か強いられるものがあり、これが人を高め、仕事を偉大にするのであると思う。諸君も何か自分の心の底にこれをやれと命ずる声あらばそれに従うべきだ。たとえそれが辛苦に満ちたものであっても。

贖罪ということも神が示したもうた贖罪の道に従うことである。その他何でもかく自らを捨てて、より命ずる声に従うのが我らの努めである。先輩の示す経験は貴重である。諸君はそのよく語る所に耳をとめこれを蓄え世に出てからこれを実地に活用すべきである。みずからを捨てて神の御声に従うのが同志会の唯一の誇りとする所なり。

外交官を志して大学に入り、同志会でその方向を転換させられた私の一生、私は与えられている今の職業を感謝し満足する。イエス様も偶然にあのようになられたのではない。大いなる神の声がそこに流れていた。我々はその心の底に永遠に神に通ずるものを持っている。カント曰く”空には星、内なる良心”と。

(昭和 25 年 6 月 16 日 金曜会)

## 金沢常雄先輩の「信望愛」

金沢常雄先輩は、官吏をやめられて内なる声に従い10年間牧師をされ、その後は独立伝道に従われた。他より何ら援助を受けることなく、経済的な苦境と肉体の不自由にもかかわらず行われるあの伝道ぶりは正に驚異の限りである。我々は心の声にのみ従っていたならば、なんら経済的な問題を意とするに足りない。世界の文化に貢献しうる人間がこの国から出るとすれば、それは同志会の他にないことを私は固く信ず。

ついでながら、金沢常雄先輩の「信望愛」。信望愛はキリスト教の基礎である。愛とは、我ら神を愛するにあらず。神より来るものなり。主イエス・キリストが神より賜ったものである。信仰とはキリストに現れる贖罪の愛をそのまま信ずることである。望もここから出てくる。信と望と愛が出てくる。これ対人的な愛なり。…

(昭和25年6月16日(続き) 金曜会)

## 聖霊の働き

最近に到り聖霊の働きという事を強く感ずるのであるが、果たして此の聖霊は誰の上に下されるのであるかと言えば、それは正直な心を持って努力奮闘する人の上にある。パウロのダマスコ途上の大転換は彼の30年に余る正直な奮闘努力に対して下された聖霊の賜である。ポーロ、ルーテル、オーガスティン、ウェスレーが今の日本に与えられるならば、知的に信仰的にまじめに奮闘努力する同志会の中に与えられるべきだと思う。日本人の血の中には強い道德心と宗教心を認められる。従ってポーロやルーテルがこの同志会に出るといふ事は大いに可能な夢と信じて祈るものである。同志会会員一同この祈りに和し、奮闘努力すべきである。

(昭和 25 年 6 月 23 日 金曜日)

## 信仰とは「まねび」

努力奮闘とは、神より賜る永遠の冠に向かい進むことである。もし教会に福音なしとすれば教会を放棄すべきでなく、その教会に福音が述べられるべく働きかけ努力すべきである。信仰とは「イエスを救い主として受ける」と言うに尽きる。これが信仰の奥義である。これに達するには人はその一生を要す。幼い子供にも信仰はあり得ると共に、経験深き老いたる聖徒にも完全に到達し得たということはない。

わずかに教会に行って信仰のわかるものでなく、一生を要するものなる信仰を得る過程に於いて、教会に行くか行かぬかは大問題ではなく何時か与えられるものであって、それまでに放棄することは危険である。行く行かぬの問題でなく、ただ教会を去るとやがて信仰への努力を忘れてしまう危険のあることを考えるべきで、その意味に於いてのみ飽く迄出席することが安全である。信仰は自分で作り出すものでなくて「まねび」であるからである。

(昭和 25 年 6 月 23 日(続き) 金曜会)

## 国法に従う

率直に言って、私は若し戦争に行くか行かないかが私自身の自由な判断にまかされている時は、勿論キリスト教の精神に従って戦争には行かない。しかし国家の一員として国家から戦争に行くことを命ぜられた場合には私は国法に従って戦争に行く。良心よりも国の命令を重視することは信仰がないことになるかも知れないが、国に生を享けている以上国法には従わなければならぬ。しかし戦争があくまですべきものではないという信念は堅持している。

(昭和 25 年 6 月 30 日 金曜会)

## 心に響いたことを実行に移せ

教会は選ぶところではなく与えられるもの、それで全てである。語学を大いにやられたい。与えられた教会に終始一貫いることが望ましい。福音を伝道することは与えられるのである。内村先生然り、私の如きも然り。

我々の信仰も神の努力が届いたものである。年老いてくればそのように結論せざるをえない。諸君が考えて得られたものではない。阪井会長も自己の心に響いたことを実行に移した所に偉大さがある。諸君も心に響いたことを実行に移さねばならぬ。

(昭和 25 年 9 月 15 日 金曜日)



## 年頭に当って自分および諸君に対する希望

① コリント前書 1 章 17～2 章 5 節。

「汝らは神によりてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて汝らの知恵と義と聖と救贖とになり給えり」(コリント前書 1 章 30 節)は、キリスト教の精神を condense(圧縮)したもの、同節解説、「聖書にかく書かれているからこそ自分はキリストの贖いを信ずる。法然上人が念仏にある如く言えば往生することが出来ると信じたのと同じ。」永遠の生命を頂いて欲しい。救われるとは永遠の生命を頂くことである。そして我が永遠の生命を頂く方法はただキリストが我らの贖い主と信ずる一手である。これが私の信仰であり、諸君にも希望するところである。

② 次に私の希望は聖書の言葉を平易に話したいことである。又信じたい。聖書をこのままに信じ、このままに述べて諸權威の注釈書を頼りにしない。

③ 次に私は平安な使徒となりたい。この世の何物を以てもくずれない平安を得たい。諸君もこの喜びと平安を持ってもらいたい。…

④ 次に服従の使途となりたい。自分であれこれ文句を言わず、馬鹿になって服従して欲しい。 (昭和 26 年 1 月 19 日 金曜会)

## 聖霊を感じる場合

私は先日から旅行をしていたが、講演題目は、「信仰を持続せよ」ということであった。聖書を読むことは聖書の命をもらうことであり、神の命を受けることである。私へ、念仏の信者であった師島村先生が、「お経に書いてあるから私はそう信じるのです」と言ったけれども、私も聖書を信じたい。聖書の言葉以外に信仰はない。…

聖霊を感じる場合聖書には必ず複数である。2, 3 の人あるいは多くの人の心と心が一致した時に神の聖霊は下るのではあるまいか。金曜会等は絶好の機会であると思う。

皆が共に礼拝に出る、食事を共にする、そのような些細なことが強い信仰に役立っている。勉強で夜遅いのはやむを得ないが、身体にも悪いしよくないことであるから、来学期からは規則的に生活し勉強されたい。我々の時代の菊井維大、橋本耕三等はそうであった。朝の礼拝に必ず全員出る。こんな事から同志会の生活は一変するのではないか。

(昭和 26 年 2 月 9 日 金曜会)